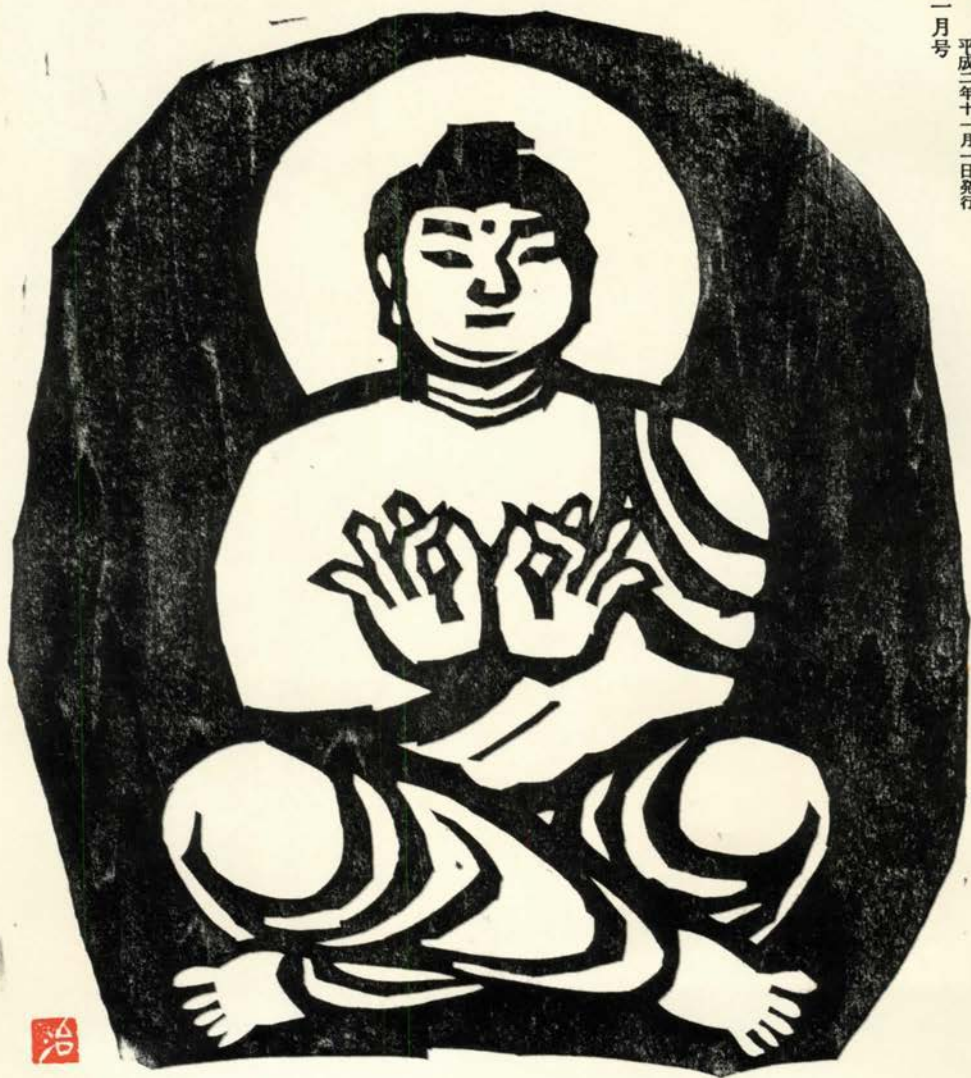


浄土

1990-11

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雜誌) 第三二五号
平成二年十月二十五日印刷 平成二年十一月一日発行
第五十六卷 十一月号





十一月の秀句

灯火親し声かけて子の部屋に入る

細川 加賀

焼にぎりかぐはしかりし夜食かな

三宅清三郎

病むわれが核の家族や冬仕度

今村 俊三

十一月号



至誠心と云は、余仏を礼せず、弥陀を礼し、余行を修せず、弥陀を念じて、もはらにしてもはらならしむる也。

——『念仏大意』

目次

——随想(Ⅲ)——

人間原理論に思う……………宮 沢 善 弘……(2)

短歌紀行

カナダ叙情……………細 田 隆 善……(18)

《にこにこ法話》

ファジィってなあに?……………長谷川 岱 潤……(10)

欣求庵主、河住玄先生のこと(上)……………金 子 寛 哉……(26)

季語やぶにらみ (7)

残暑の総決算 (2)

……………木 下 隆 一 ……(33)

◇◇連載・話の旅(四)◇◇

超常物語 ①……………松 浦 行 真……(41)

表紙絵 小林治郎画

(隨) (想) (Ⅲ)

人間原理論に思う



みやざわぜんこう
宮沢善弘

(横須賀市正観寺住職)

八月初めの頃だった。「宇宙論が楽しくなる本」(別冊宝島一一六号)というのを書店でみつけた。イントロダクションの、『物理学ではなくて、宇宙論を愉しむ(編集部の説明)』というのが面白くて買って帰った。

この本は、最近の凡その宇宙論を系統的に整理して紹介するもので、その道の学者や専

門評論家が分野別に参加して記述している一般向けの解説書である。この本には、科学に全くの門外漢である私をさえ、何か分かるような気にさせてくれるところがあった。

難解な数式や方程式、それ等を基にして展開される高遠な天文学理論、それらは何れもが私にとってお呼びでない。それなのに何かしら、漠然とではあるが分かるような気分になる。これは誠に不思議である。

さて、そのイントロダクションの内容であるが、『何か分かるような気に……』と言った言葉を弁護してくれそうなので、少し長いがその一部分を引用しようと思う。

『宇宙論の解答はひとつではない。誤解されるのを承知でいえば、それは多ければ多いほどいいし、それはまた、系譜的にしかも時系列的に編成されなくてもよい。科学史家のT・クーンが言ったように、革新的な宇宙論が旧来の宇宙論を次つぎに打ち破ってパラダイム・シフト（活用・変化）してきたのは事実かもしれないにしても、それは我々の認識のしかたが大きく変っただけで、過去の宇宙論が消滅してしまったことを意味するものではない。例えば、車椅子の天才ホーキングがユークリット宇宙の有効性を理論づけたのを見ても、インフレーション宇宙の多重発生モデルが後期ルネサンスの哲学者ブルーノの無限多世界論に相似してくるのも、それがたんに暗号のいきにとどまらず、我われの宇宙への思

索のヴェクトル（すじみち）が線型ではなく、いわばジグザグに進むからである。我われ人間が誕生して以来、「宇宙をどうとらえるか」という永遠の主題を忘れないでいる理由もまたそこにある。宇宙は相変わらず謎だ——ここに尽きるものではなからうか。何度この疑問を出発点にするほかないのである』

（ ）内は私註

たまたまその後の九月九日午後九時に、NHKの総合テレビと民放第4チャンネル日本テレビの二局がそれぞれ、同時刻に、全く別な大変興味深い番組を放送した。

昭和の初めの頃を想うと、ラジオ放送はNHKが唯一のもので、第一放送と第二放送の2チャンネルだけだった。聴きたいと思う番組が同時刻に重なる時は、二台の受信機を用意すれば一応は足りたのだが、当時のわが家には一台しかなかった。ましてやテープレコーダーなどあるわけではない。だから一方をアキラメル外になかった。

今はVTR・ビデオテープレコーダーという便利な物がある。私は安心して日本テレビ「奇跡の二人、ヘレンケラーとアニー・サリバン、二人はなぜ『愛の奇跡』を成しえたのか」ほうを録画することにして、一方の、NHKスペシャル「スチーブン・ホーキングの宇宙」の方を視聴した。

人類をのみならず地球上の生命体の安泰をも脅やかしかねないと、今日、とにかく悪者

扱いされがちな科学技術の発達だが、私にVTRで録画する選択を任せてくれるというような、それ本来の利便や恩恵はあまりにもアタリマエになって目立たないから、軽視しているのではないかと残念に思う。

さて、ホーキング博士といえば『車いすの天才と呼ばれるイギリスの物理学者で、ケンブリッジ大教授……』と、新聞の番組解説では紹介していた。世に車いすで生活する人は非常に多い。しかしホーキング博士のその姿を見ると、簡単に『車いすの天才』などと紹介できるものではない。テレビのお蔭でそのすさまじい生命力と行動の姿を目のあたりにしたが、言葉だけでは、博士のあのぎりぎりの学究活動の姿の現状とともに、とても理解できるものとは思えない。

私は九月九月午後九時という九九九の重なりを「苦苦の苦」という気持ちで受け止めた。考えてみれば、今日の医科学技術の進歩発達がなければ、正直に言って、博士の生命の維持は不可能だったろうし、博士が『宇宙論に取り組み、ブラックホールやビッグ・バンなどの理論化に目覚ましい業績を上げる……』ことなどできなかったらう。

東京大学での講演のために来日されたのだというが、博士は、気管と声帯の損傷で、ものが喋れない。意志の伝達は全てご自身がキーボードに打ち込むワープロの信号文字で表現される。この意志の伝達媒体とそれを仲介して代弁する夫人の助けなくしては、いかに

博士が天才の頭脳を飛翔させ、宇宙論の蘊奥を縦横に探究し、さらには卓越した「直観」をフルにはたらかせて、斬新な宇宙論学理を構成し得たとしても、誰が客観的に外部からそれを知り得うる事ができたらうか。

因に、その「直観」についてのことは、番組編成者の特別な配慮で難しい数式の例示などが少なく、なお分かりやすい解説（京大佐藤文隆教授）のお蔭もあって、放送を視ながら強く感じたことなのである。

ホーキング博士にも、ブラックホール理論の構成過程の重要な局面で、何度かの『気づき（直観的ひらめき）』があったということなのである。

以下は受け売りの話だが、博士は、何でも吸い込みどんどん縮んでいくという以前のブラックホール学説に対して、その事象の平面（表面）では時間が静止するので、ブラックホールは縮むのではなく広がる外にないのだという事実と、そうならば熱放射がなくてはならないはずだと、これらに気づき、そこから量子力学的メカニズムによる『蒸発し、爆発するブラックホール』という物理学界を震撼させる大発見をしたとされている。

学問探究の過程において、一つの『気づき（直観的ひらめき）』が学者・研究者に契機となることは、リンゴの落下とニュートンの事例をまつまでもなく、新しい学説の誕生にまつわる話としては、しばしば伝えられるところである。

人間の学としての科学に、人間の『直観』がどれほど大きく関わるかということの良い実例であろう。

さらには、ホーキング博士やその他の先進的学者の研究が、今日の宇宙論を『人間原理宇宙論』とさえ呼ぶに至っていると聞く。

人間原理とは、人間がいなければ宇宙はないという程の、極限の科学的認識とさえ想われる。しかし『人間原理』ということでは、人間は古くからこの『原理』に立つ人間文化のもうひとつの重要な側面・宗教を持っている。殊に宗教の著しい特色は、『原理』に最も先行するその前提の『直観』を重視する。

世界の多くの宗教は、自ら『創世』をどう扱うかこれをどう説明するかで、その宗義の特徴を明らかにし他との弁別・分類の根拠とする。宇宙の起源・構造・その終焉等に対する「直観的考察」は、その宗教の文化水準を測るバロメーターなのである。

宇宙の起源をどう説明するか、これをもって集約すると、その是非は別として、世界の宗教は二つの立場に大別されよう。

(1) 神によって創造された。

(2) 自然の理によって発生した。

私は自分が仏教徒なので仏教を例にして言うのだが、仏教は仏の悟りの内証（釈尊の直観）に立脚して、明らかに（２）の立場をとる。仏教の場合は、万象は因果の理によって在り、因縁によって生滅する。つまり縁起論であるが、私は今、『縁起』と『自然の理』の関わりで自問したいことがある。光速度を絶対とするアインシュタイン相対性理論は、『因—果』はその順で逆転しないが、ホーキング博士等の『無境界宇宙論』などという最新理論では、膨張する宇宙と収縮する宇宙とを同時に含む『無』の概念さえもが論上にあるという。もしこの理論が『自然の理』になると、在来の因果律はどうなるのか。

再びイントロダクションの『……宇宙への思索のヴェクトルが線型ではなく、いわばジグザグに進む……』に目を向けよう。そのジグザグな動転に、仏教徒達が釈尊の直観（悟りの内証）の本旨を領解して、動じない確信（信仰）を教理上で持てるかどうか。

正念場はやがて来る。悲観的要素はないにしても、科学と宗教の関わりは、『直観』や『人間原理』などを介して、もはや別のものではあり得ないところにまで来ていると思うべきだろう。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

弁当は豪華にならないようにという、項目があり、お母さんもそれなりに気を使って作っていたので、けげんな顔で聞き返しました。

「私も、そうは思わないのだけどね。隣の健君や拓郎君たちが、いいなあ、いいなあってあんまり言うもんだから、先生に、気をつけるようにお母さんに言いなさいって、みんなの前で言われちゃったんだ。だから気をつけよ」

「今日は確かにお母さん手抜きでさ、昨日の晩のおかず、間に合わせに入れてしまったのがいけなかったのね。でもそんなに豪華だったかしらねえ。ミーちゃんは何がいけなかったと思う」

「海老のクリームソースのことだと思うんだ。だってねえ、みんなのおかずって、ハンパ

グか、ミートボールか、ウインナーって、決まっちゃってるのよ。だから珍しいからそんなふうと言われちゃったんだと思うんだ」

「みんな好きだからねえ。うちも多いしね。でもこういう基準で、豪華か豪華じゃないかって言うんでしょうね」

「デザートがついていると、豪華っていう感じがなあ。今日もついてたじゃない」

「でも、りんごで、豪華っていう感じになるの」

「ううん、わかんないや、先生に聞いてみようか」

「そうしてよ。お母さんも作るのに考えちゃうから」

「そんなこと、先生に聞いたって答えてくれるもんか。あいまいなことなんだから、自分

で考えなさって言われるだけよ」

隣の部屋で何気なく聞いていた、お父さんが口をはさみました。

「だって、規則にまで書いてあるのよ。そんな、あいまいじゃ困るわよ」

「そんなこと言ったって、先生だって解っていないことなんじゃないのかなあ。みんなと比較したときの感じでしかなく、具体的には、何にもないと思うけどなあ」

「そんないいかげんな決まりで、私みんなの前で怒られたりしちゃうの、変なの」

「初めて言われたんだろ、軽く、気をつけるように母に言っておきますって、言っておけばいいのさ」

「でも作る私の立場とすれば、どう作っていか考えちゃうわよ。ハッキリ豪華すぎるも

のなら怒られたってしょうがないけど、言われても考えちゃうようなものだ、次どうしたらいいのかわからないじゃない。あいまいじゃ困ります」

「お母さんの立場じゃそうだろうけどね、それが今の学校というところの現状なんだよ。そういう中で、毎日ミーちゃんやチーちゃんは生活しているんじゃないか。怒る気持ちもわかるけど、怒る気持ちがあるならその分、ミーちゃんやチーちゃんが先生の悪口を言うときに、聞く耳を持ってあげなさい」

「お父さんは学校にあきらめちゃってるんですものね。私はあきらめませんよ」

「いや、別にあきらめているわけじゃないさ。ただ今回は初めてのことじゃないか。二度三度と続くようなら、その時はお母さんが直接

学校に行つて、先生に聞いていらつしゃい。

これはミーちゃんが、間に入らないほうがいいと思うよ」

「そうね、その時はそうするわ」

「お母さん、今日夕飯の用意手伝うね」

ミーちゃんは何となく、嬉しい気持ちになつていました。

夕食を食べながら、テレビのコマーシャルを見ていたお母さんが急に言いました。

「うちもそろそろ洗濯機買い替えなくちゃと思つていたのよ。こうファジイっていうのがついているのって、もう何にもしないでいいそうよ。勝手に布質まで判断して洗つてくれるんですって。いいわねえ。これにしようか

しら」

「ファジイって何なの。最近は何にでもついてるわよね。ビデオカメラから、掃除機から、ヒーターまで、最近新しく出るのって、みんなファジイ、ファジイっていうじゃない。何か魔法みたいなことなのかな」

ミーちゃんは前から疑問に思つていたのでしよう。誰も答えてはくれないだろうとは思いつつ、独り言のように言いました。

「何か人間に近い判断ができるんですって。アメリカの人が考え出した新しい技術で、人間の目や、人間の感覚に近づいたって、電気屋さんも言つてたわ」

「何だ、お母さん、もう電気屋さんにまで行つていいのか」

「ちょっとカタログをもらいに行つただけで

すよ」

お父さんとお母さんの話を無視して、ミィちゃんは更に聞きました。

「ねえ、ファジィって言葉、どういう意味なの」

「さあ、それはお母さん聞かなかったわ」

「お母さんの嫌いなことだよ」

お父さんはニヤニヤしながら話を始めました。

「ファジィっていうことはね、『あいまい』

ということなんだって。お父さんの同級生で、化学会社の研究所に勤めている人から聞いた話なんだけどね。あいまいなこと、いい加減なこと、中途半端、そんなような意味があるそうだよ」

「何それ、変じゃない。現代の科学のトップ

技術よ。そんなわけないんじゃない」

「でもそうなんだよ。考え方としては簡単なことで、もう何年も前に理論化されていたそう。つまり今までの科学が、答えを出すときには、イチかゼロかだったものが、その間の中間をまず答えとしようということ。つまりあいまいなことを、まず最初の答えとしてしまおうという理論だそう。正解かはずれではなく、必ず正解に近いものにしてゆこうという考え方なんだね」

「それがどうして、不思議な魔法になるのかしらねえ」

「いろいろな製品に、この技術を応用したのは日本人だそう。科学的なことは解らないけど、あいまいな判断ができるのが人間であり、そしてそのほうが実際の社会では役に立

つということなんじゃないかな。機械にも、このあいまいな判断をさせようと考えたことなんだろう。あいまいというから聞こえが悪いので、臨機応変とか、応用がきくとか言えればいいわけで、それが不思議な魔法ということなんだと思うよ」

「最先端の技術といたって、その考え方っておもしろいわね。あいまいとか、いい加減がいい意味に思えてきちゃうわ」

「お父さんは、初めからいい意味だと思っているよ」

「ええ、どうして」

今までお父さんを尊敬の目で見つめていたミーちゃんが、けげんそうに聞きました。

「あいまいはともかく、いい加減はとっても仏教的な考え方だと思っているんだ。仏教の

言葉で言えば、中道ということになるかな」

「中道って真ん中ってこと」

「ちがうよ、一番いいところってことだよ。

たとえば、おふろで湯加減どうなんて時に、ちょうどいい加減だなんて言うでしょう。あれがもし中間地点ということだったら、水と沸騰の間だから、ぬるま湯っていうことになっちゃうじゃない。だから、いい加減。中道というのは、中間ということじゃなく、その人にとって一番いいところっていうことなんだよ。だからこれは人によっても違うということ、つまり正解はひとつではなく、人それぞれにあるということを忘れちゃいけないということだね」

「ずいぶん、めんどくさいんだね」

「そうかな、答えが一つのほうがそりゃ簡単

かもしれないね。でも、その時、その場所、

その人によって答えが違おうほうが自然だと思わない。さっきのファジィの話じゃないけれど、いつも正しいか、間違いかというふうに一つしか答えがあるんじゃないくて、そのどちらでもないところの正解が、もっとも人間にとって都合がよく、自分にふさわしい答えになるんじゃないかと思うんだ。つまり、両方の極端を排した時、人間本来の生き方ができると、お釈迦様は解いているんだよ」

「それがいい加減に生きるということなの」
「そう、両極端を排し、こうでなくてはいいけない、こうしなくてはいいけないという概念に捕らわれずに、自由に、のびのびとゆったりした気持ちで生きるということだね」

「ちょっとお父さん、あんまり楽に生きるこ

とを、勧めないで下さいよ」

「いや、楽じゃないですよ。枠組みの中にはまることのほうが余程楽だと思うな。いい加減に生きるということは、一つのものに執着せず、何にでもトライすること、そして他人のすることを批判したり文句をつけずに、広い心を持ちながら自分の道を歩むこと、こういうことだと思うよ。お父さんが言っているいい加減な人間というのは、要するにズボラとかちゃらんぽらんではなく、硬いところから軟らかいところまでを、緩急自在に生きる人間ということだよ」

「ステキね、ミーちゃんもそんなふうに生きたいな」

お父さんは満足そうに笑っていました。

◇ ◇ ◇ 新購読会員のご紹介 ◇ ◇ ◇

月刊誌『浄土』の刊行、なんとか続いているという現状です。編集にもにも遺漏が多く、また校正のミスも相変らずです。出版印刷をお願いしている方々にも、きびしい業界の昨今のありようの中で、ともかく懸命のご配慮をいただいております。わずかの人数での雑誌出版、発送をめぐるさまざまな営み、ともかく『浄土』の灯を消すことなく、法然上人鑽仰会の六十年にならんとする歩みを止めることはありません。失敗や不手際の多いことながら一歩一歩の歩みを今後も少しづつ進まなければなりません。

会員読者諸兄にご迷惑をおかけすることも決して少ないことではなく、この上なにかをお願いもできにくいことではありますが、どうぞ今後とも暖かいご助成、ご支援を切にお願い申し上げる次第です。なにを隠しましょう、一ページ、ポツカリあいた埋草として、心よりの謝意にあわせて、臆面もないお願いを記させていただきます。

法然上人鑽仰会

短

歌

紀

行

カナダ叙情

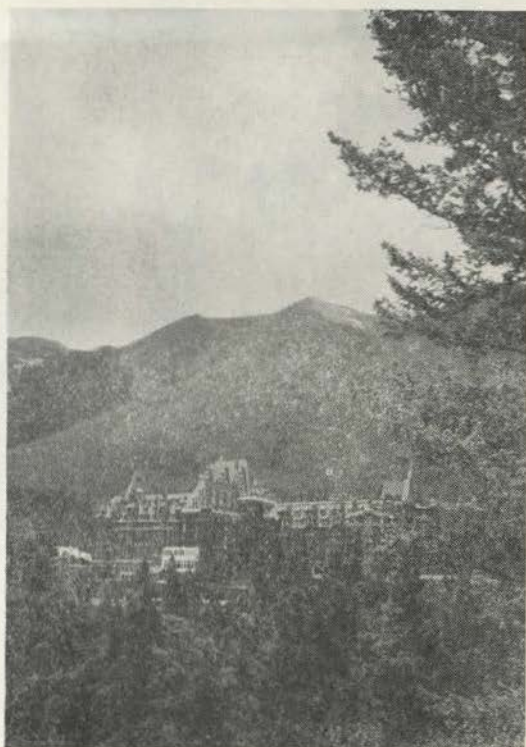


細田隆善
ほそだ りゅうぜん

カナダはソ連につぐ世界第二の広大な国であるが、人口は二千万、石油等の地下資源豊富、松、杉等の林業もさかん、鮭などの漁業もさかんである。大氷河を抱くカナディアン

ロッキーがそびえ、広大な大平原に草萌えて、エメラルドに輝く湖はいたるところに、とくに六月のカナダはすばらしく美しい。まずは、ロッキー山脈のふもとバンフの町を訪れた。

山迫るバンフの町はリラの花
咲き盛りゐて札幌偲ぶ



—— スプリングスホテル（バンフ） ——

夜もすがら^{びやくら}白夜の如きバンフから

カナディアンロッキー雪光り見ゆ

百年前建ちて古城に相似たる

スプリングスホテルロッキー
を背にして

カナダロッキー三千メートルの山
を背に

バイト湖の色エメラルド濃し

ロッキー山脈の山並み近き針葉樹^{しんようじゆ}
間の広野にタンポポが一面に咲き盛
り、野生の大熊が一途にタンポポの
花を食べていた。タンポポの花には



——タンポポが満開、熊が食べる（ロッキー山麓）——

若干の麻痺性があり熊は食べると気持ちが悪くなるという。

ロッキーの裾なる原野に茶色なる熊はしきりにタンポポを食む

コロンビア大氷河を雪上車にて昇り、氷河を見る。雪渓は真白であるが何万年もかかって圧縮されてできた氷河は淡くブルー色であって、毎年幾センチづつ流れるので氷河という。

雪上車氷河の上を緩やかに

昇り氷河は淡きブルー色

ロッキーの氷河の水は冷えまさり

ウイスキーに注ぎ飲む人の笑む

ロッキーマウンテンの三分水源のせせらぎは

太平大西北極海へと



——氷河に輝くロッキーマウンテンの山を背にバイト湖——

前回冬期オリンピック開催のカルガリー市も訪ねる。当時の施設は今もなお使用されている。その周辺は大平原、川あり丘ありで、

映画「天と地と」のロケが実施せられ、製作費五十億円の大半がここで使用された。日に三千の学生がバイトで参加、千頭の馬を使用した。武器類は日本から持参、学生の女性部隊まで動員したものである。

カルガリーのオリンピックアタワ
出づるとき

はげしき雷雨に雹の降り来ぬ



——コロンビア大氷河（カナディアンロッキー）——

「天と地と」ロケを続けしカルガリー

三千の学生集めしといふ

「天と地と」ロケに千頭の馬使ひ

カナダへ経費三十億を

「天と地と」映画のロケに学生の

青き目と馬映つるを避けり

バンクーバー北部のサリー市と江東区は昨年提携都市の調印をしたことがあり当市を訪ねる。サリー市は人口二十万、江東区は四十万であるが、面積はサリー市は東京都二十三区の半ばを占めるほど広大である。材木の産地でもあることから木場の江東区と縁を深めたものである。



——パンクローパーの明るい女性たち——

新緑の萌ゆるサリー市の効外に

ラベンダー咲けり紫の濃し むらさき

サリー市の市長議員ら会場に

明るく笑みて並べ迎へり

サリー市の市長の迎ふる会場に

国旗と並び英国旗立つ

サリー市の赤紫の葉の茂る あかむらさき

チャイナ―チェリーの並木の続く

パンクローパーのホテルのロビーに大いなる

鮭の剝製吊しおりぬ はくせい

バンクーバーの川に浮べる原木げんぼくの

数多並みゐて木場を思ひぬ

カナダはイギリス系の人が多く、これについでフランス系の人、英仏両国語が公用語になっている。カナダの人たちはなべて明朗である。

カナダ国は英語と仏語を公用語

庁舎も信号も両国語並ぶ

手を握るカナダ女性^{みえ}は明るくて

楓かえでのリボン匂ひ残れり

△日本図書館協会選定図書▽

『江戸物語』

細田 隆 善△豊明▽著

四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点

収録／定価一八〇〇円

【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六一三九一七〇一

電話(〇三)二六九一一二九三・二六七一一六六三七

振替(東京)七一〇九三／千一六二

好評

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、讚重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、發願文、五懺悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る 念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳 念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人 勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳浄土三部経

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人 選択集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師 観経四帖疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師 六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

檀信徒用 浄土宗のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)

訳と編 村瀬 秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

発行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番

欣求庵主、河住玄先生のこと(上)



金子寛哉

(大正大学講師)

(一) はじめに

私が河住先生に初めてお会いしたのは、今からかれこれ二十年程前のことで

ある。私の父(金子真補)がまだ大正大学へ奉職中で、先生が何かのご縁で父の所へ法然上人のことをお尋ねに來られた時のことであつたと思う。

端然と正座してお話していられた様子が今でも思い出され、まことに謹厳実直な人柄が感じられた。父はその後間もなく定年退職し、その為先生からの依頼事項や大正大学の図書館にある図書の確認など、父からたのまれて時々お手伝いするようにになった。しかし、その頃は私自身も多忙で、在俗の人なのに随分熱心な人もいるものだと思う程度で、あまり注意もせずに過ぎた。それは、私にとっては先生が父の知人という間接的な関係にあった為でもある。

先生からの依頼は何時も半紙に毛筆で記され、文体は漢文調で、しかも簡潔で

あり、文字は活字のように整然と並んでいた。この信書の文体と文字が先生の生いたちとそのお仕事をそのまま表わしていたのだということに気づいたのはずっと後になってからのことである。

先生からの依頼の多くは図書の探索と同時に先生の著書が大正大学の図書館へ寄贈する為にお届けすることであった。寄贈する図書は先生自らが書かれた原稿を、恐らく自らの手で原紙を切り（信書の毛筆と同じ字体で）、謄写印刷し、製本された所謂する自家製の図書である。それらの事も最初の中はそれ程気にもとめず、奇特な人もいるものだと思う程度で

あった。寄贈図書は図書館へお届けすると同時に、いつも父の所へもいただいた。た。

所が何年かする中にその書物の量が見る見る中にどんどんふえて行ったのである。しかもその書名を見ると、自分の専門分野と重なる内容の物が、次々に謄写印刷され、刊行されて行くのである。幾ら迂闊な自分の目にも止まらざるを得ない程のスピードと著作の分量であった。そうこうする中に父も次第に老齢になり、大学から縁遠くなったこともあって、先生からの依頼も直接私宛に来ることもあり、内容的にも同一専門分野であ

ることから、出来るだけ対応することにしていた。しかし、スローモーな私の対応では先生のスピードに追いつかず、先生が直接先方に確認の上問題点を整理され、印刷して送って来られる書物を見て、はじめて自分が対応し切れずにいた事を知ったことも何回かあった。

このようなおつき合いであった為、先生の研究や仕事の分量、そしてそれに対する気迫と同時に、原稿作成、原紙切り、印刷、製本の作業がどれ程大変な努力と忍耐を必要としたかということが、手に取るように良く見えて来るようになったのである。私のこれ迄の人生の中で

も多くの人々に出逢い、種々様々な教えや恩恵を受けた人々は沢山いる。しかし一つの仕事(信仰)に真っ向うから取り組んで、このように精力的に仕事を進めた人に出逢ったのは初めてである。その意味では研究分野での恩恵もさることながら、研究者・求道者としての生き方を、身をもって示してくれた人として畏敬の念を持って受け止めているこの頃である。

(二) 先生の略歴

先生の精進努力とそのお仕事の内容を見るにつけても、いっか何等かの形で紹

介したいと考え昨春失礼とは思いながら先生ご自身の略歴を所望した所、すぐさま『梅窓書屋詩稿』という一書をお送りいただいた。この書は先生が昭和五十三年に七十歳になられたのを記念して、自らの漢詩の作品を編年体に配列し、巻末に「略年譜」を付してまとめられた自伝である。

この書の「略年譜」によると、先生の御出身は福島県石城郡湯本村で、明治四十一年の誕生となっている。その後大正九年私立日本中学へ入学し、同校卒業後、同十四年大東文化学院に入学。昭和四年に同校を卒業し、二松学舎に入学。

そしてその後の数年間は専ら漢学の研究と仕事に集中されたようである。しかし、昭和十一年には諸種の事情で意の如くならず、北海道の札幌第一中学校に赴任する。

札幌を辞して栃木県の宇都宮中学校に転任したのは昭和十五年三十二歳の時である。その後同十九年には応召入隊し、中支へ派遣され、復員帰国したのは昭和二十一年三十八歳の時であった。栃木県宇都宮市大塚町の現住所に居を構えたのは昭和二十四年の事であり、その後は今日に到る迄この地が生活の拠点となつて各地の高等学校へ奉職している。即ち、宇都宮松原高等学校、宇都宮高等学校、

校、石橋高等学校と転任し、昭和四十二年三月公立学校を定年退職され、鹿沼高等学校の嘱託講師や、宇都宮須賀高等学校等にも奉職している。

しかし、公立高校の定年退職を機に、先生にとつては大きな一つの心の転機を向えられたようである。「略年譜」の昭和四十三年（六十歳）の項に「これより法然上人に帰依す」と記され、又後にも記す先生の詩稿や、私の拝見した先生の著作の中にもこのことは明らかに示されており、先生が拙寺へ父を尋ねて来られたのもこの後間もなくの頃である。

先生は『梅窓書屋詩稿』の後記に次の

ように記している。

自分が漢学に志したのは、中学三年生 すなはち十四歳の時であった。爾来五十余年間 漢文を教へ 移り変はりのはげしかった時代を生きて来て 本年七十歳となり、どうやら人生の終点も近づいた感じがするので、これまでに作った詩文をまとめ ここに過ぎ来し方の概略を記しておく。〔中略〕自分は功もなく名もなく碌々光陰を送って いつしか七十歳の老書生になってゐた。顧みて自分の学業は 思想の面では 陽明学から禪宗へ、そして六

十になって欣求浄土の念仏へと 迷ひの遍路を辿って来た。すでに残り少い生涯 この辺で信心を固めたいと願っている。〔下略〕

私が接した先生はこのような人生の旅路を経た後の、第二の人生に入って間もなくの時だったことになる。それだけに尙一層その精進努力には目を見はらされるのである。

先生に略歴を所望した時の返信には次のような補促が記されていた。

自分は少年時から漢文を専攻してき

た。しかし母方が熱心な真宗門徒で、幼少時からお念仏を教へられて育った。既に年を取るにつれて、儒学の現世主義だけでは満足しきれないものを感じるようになった。父方が曹洞宗であつたので、まづ坐禪を学んだ。しかし、自力の修業で開悟することの困難さを感じ、定年退職した六十歳の頃、親鸞聖人を学ぼうと、まづ、その師法然上人の法語などを読み始めた。その内に法然と親鸞との相異が判つてき、自分の性格のままに、つひに法然上人の教へに留まつたのである。この二十年且暮のお念仏に余生を托してきた

が、煩惱愚痴の凡夫で、小知を捨てて大愚に徹しきれないこと、これが一番の苦悩となつてゐます。

右の文中にある幼少時からの念仏への縁は「略年譜」中の昭和八年（二十五歳）の項に「この年 光明会に入り 浄土宗を学ぶ」とある記事とも連関し、又坐禪の修業も同「年譜」昭和三十年（四十七歳）の項に「これより雲巖寺開山仏国国師を尊崇す」と記していることから明らかにである。

（つづく）

残暑の総決算 (2)

木のしたりゆういち
下隆

(随筆家)

立秋のあと、十月までに伊豆半島に影響した台風は三つあった。八月十日の昼間11号が、九月十九日夜半から二十日未明にかけて19号が、そして三十日の夕刻20号が矢継ぎ早に駆け抜いたが、いずれも陸地に近づくまでは時

速十キロ・十五キロと自転車並みの速さで気をもませた。しかし上陸するや否やあっという間に日本を縦断して三陸沖に出ると、あっさり温帯低気圧に変身して去って行った。上陸地点や通過したコースは異なっている、

三つが三つとも雨台風で、旱魃が続いていた沖縄県や南西諸島では恵みの雨だったがそれも程度問題で、特に九州では水害で多くの人命が失われたのは痛ましい限りであった。戦後すぐ鹿児島県に上陸して大災害をもたらした、梅崎春生の「或る無名台風」や宮本百合子の「播州平野」という名作を生み、後に「枕崎台風」と名付けられたあの台風のころに比べると、予報技術が格段に進歩して、台風規模や進路の予測がほぼ正確につくようになった今日でも、この体たらくなのだから、自然の力に抗すべくもない無力感を感じるのは私だけではないだろう。

台風の進路に氣をとられているうちに、日本海にあった秋雨前線を刺戟して思いがけない所が集中豪雨の被害にあつて、今後の気象

予報学の在り方に課題を残したが、鉄砲水や土砂崩れの元凶に、照葉樹林を伐採して針葉樹林に変えてしまったこと、河川の河床や護岸をコンクリートで固めてしまったこと、また無計画なゴルフ場などの開発を挙げて、人為的災害だと指摘する人もいる。確かにそう言えなくもないな、と私も思う。開発されたリゾート地の一点に住む私に、そんなことを言う資格があるかどうかは疑問だが、すでにゴルフ場が幾つもある伊東市内に、更に六つも新たな造成計画が申請されているというから呆れる。一体どうなっているのかと、土地の事情に詳しい人に聞くと、

「大室山の麓辺りが狙い目なんでしょうが、六つも一遍に出来るほど土地に余裕はありませんよ。一個所に何件もの申請が集中してい

るんでしょう。でも、このところの株価の暴落で、だぶついていた資金がなくなってしまう。ええ、そのうちの幾つかは自然消滅してしまふんではないですか。非生産的なゴルフ場ばかり造っても仕様ありませんものね」

ということであった。

台風が行ってしまった、大抵は澄明な空が甦り、秋爽の気が漂うものだが、今年はいつまでも残暑が居坐っていて、「爽かや明けゆく雲の薄あかね 隆一」という風情は望むべくもなかった。

台風19号の襲来は東京で迎えた。夜半過ぎ通過したというが、眠りこけていて私は知らなかった。朝になって、

「家、無事かな？」

と言うと、

「大丈夫よ。たいして吹かなかったし、雨が激しかったのは一時間足らずだったから。二階の雨戸はちゃんと閉めて来たんだし……」娘は極めて楽観的だったが、予感というのであろうか、私の心には何故か何か引っかかるものがあつた。

19号が去っても、日中の暑さは相変わらずだったが、日が落ちると涼しさが戻って来た。ような気がしたのは、急に数を増した虫の音が、そう感じさせたのかもしれない。

九月二十日、二年ぶりに以前の勤務先のOB会に出席した帰り道、酔い醒ましを兼ねて駅から家まで歩いてみた。途中、桜樹に囲まれた児童公園のベンチで一服すると、忽ち降って来た青松虫の声に包まれてしまった。虫しぐれと風流に形容されるような鳴き方では

なく、まさに土砂降りである。一匹二匹ならともかく、こう「リーリー」と鳴き立てられると可愛げがない。声がいいだけに、一層その思いが募る。そのうち、紫煙の彼方に幼かったころの娘の顔がふと浮かび、そして、そうだ、この虫の声を初めて聞いたのはこの公園だった……と思い出したのである。

何の本だったか忘れたが、どうしても欲しいと急に娘が言い出して、日が暮れてから駅前の本屋へ出向くことになった。結局お目当ての本はなく、不機嫌な娘にテトラ牛乳と言ったか、三角錐状の容器に入った牛乳を買って与えてご機嫌をとり結び、この公園でひと休みした時、

「どうして、ここの虫は木の上で鳴くの？」と聞かれて、意表をついた質問だったので

返事に窮した。

「それはな……、それは……この辺に草叢がないからだよ」

答えにならない答えだったが、娘にも虫は草叢で鳴くものという先入観があったのか、それ以上は突っ込んでこなかった。昭和四十年秋のことだったと思う。

この樹上で鳴く虫の正体の詳細を私が知ったのは、それから更に二十年経った六十一年秋、朝日新聞夕刊に連載されたコラム「自然界の密航者」に於てであった。

「アオマツムシは、今や東京の『鳴く虫』の代表だ。『リー・リー・リー』と三々四々ソチの体の割には大きな声で鳴いている。日本で初めて確認されたのは明治末。東京都心の木の上で突然鳴きだした聞きなれぬ虫の正

体がこれだった。姿はマツムシに似、体色が緑なので『アオ』と命名された（註、松虫は淡褐色）が、どこから来たのか皆目わからない。（中略）大正から戦前にかけて都心の秋の夜をにぎわしたが、戦後の二十数年間は、東京から完全に姿を消していた。同じく街路樹をすみかとするアメリカシロヒトリが大発生、その根絶のために大規模な殺虫剤散布が行われて、巻き添えを食ったのだ。再び東京へ戻ってきたのはオリンピックの喧噪も去り、町並みも一変した一九七一年（昭和四十六年）ごろ、戻ったのは都心を避けて青梅地方に疎開していたグループで、当時開通した新青梅街道に街路樹が植えられて、アオマツムシの大好きな街灯もたくさん付けられたのが呼び水になったという。これを伝って一気に動き、杉並

区までの三十キロをわずか三、四年で到達。（中略）東京以外の地方への進出にも、高速道路の開通などがきいていとされている。（後略）

そして、この記事には、松浦一郎という鳴く虫研究家が、中国から贈られた翅の標本で、原産地を確認したのは一九八〇年であったということも記されているが、中国のどの辺りに生息するかについては、全く触れていない。東京の家は青梅と杉並の間に位置しているから、もしかするとあの夜聞いた青松虫は、都内に侵入を開始した軍団の尖兵であったかと、この記事を読んだ時思ったが、青松虫はここ数年来伊豆でも聞かれるようになった。日没から十時近くまで、我が夜の秋を謳歌して盛んに鳴くが、ある時点でパッと一斉に鳴

き止んでしまう習性があり、後はリーとも鳴かないのである。何がきっかけで鳴き止むのか分からないが、その見事さには無気味なもののさへ感じる。以前はガチャガチャと喧しく鳴いていたツツワムシの声も、今は全く絶えてしまった。断定は出来ないが、すでに伊豆半島の虫どもは青松虫に制圧されてしまったのかもしれない。

因みに青松虫を歳時記で見ると、「最新俳句歳時記（文芸春秋刊）」「日本大歳時記（講談社刊）」とも松虫に一括し、「外来の一種に青松虫があり、松虫に似て緑色で、常に梅・桜・桃などの樹上にすみ、チリリリリと遠くまでその声が聞こえる」とだけ記されていて、作例はない。両歳時記の記述が同文なのは、編者が同じ（山本健吉）なので到し方ない

にしても、芸のない話である。住む所も体色も鳴き声も全く違う虫を、単に形が似ているというだけで、一括してしまっているのは、偏に俳句作家の不勉強であり、伝統に胡座をかいた巨匠と目される指導者たちの怠慢だと私は思う。一日も早く、季語として独立させてやりたいものである。

それにしても、擬声語というのは、つくづく難しいものだと思う。私には「リーリー」と聞こえる青松虫の音が、辞典類には「リュウ・リュウ」と記されていたり、人によつては「チリリリリ」と聞こえたりするのである。私に虫の鳴き声の概念を植えつけたのは、「あれ松虫が鳴いてゐる／ちんちろちんちろちんちろりん（後略）」という小学唱歌の「虫

のこゑ」であつた。これによつて私はいまだに松虫は「チンチロリン」と鳴くと信じているが、実際にその声を聞いた記憶はない。ましてや、昔の鈴虫は今の松虫で、昔松虫は鈴虫と呼ばれていたと言われてもピンとこない。この逆転現象が起きたのは、文献ではいろいろ傍証を挙げて平安中期以後としているが、何故そうなつたか、つまり「チンチロリン」と鳴いていた鈴虫が、「リーン・リーン」と鳴く松虫に取つて替わられたのには、それ相当の理由があつたはずなのに、そのことについては全く解明された形跡はない。

鈴の音には催眠効果がある。宗教的に人心を収攬するには、格好の小道具であつたと思われる鈴そのものの形が、変化したからではないか、と私は考えている。上古の鈴は今の

ように空洞ではなく、複数の金属の球をぶつけ合つて、硬質の響きを発するという形のものではなかつたか。そして後に大陸から伝来した鈴は、振れば空洞の球体の中に入れた金属片が内壁に当たつて「リーン」と共鳴し、その澄んだ音色は忽ち人の心を魅了したと考えれば、「リーン」と鳴く松虫に鈴虫の名が与えられたのは、ごく自然の成り行きだったに違いない。

台風後の家の様子が気になりながら、予定を二日遅れて帰つてみると、台風の被害は全くなかつたが、啄木鳥に雨戸を直径十センチほど、いびつな円型に打ち破られていた。啄木鳥が散らした木屑を掃き集めるのが、今年の残暑の総決算となつた。

(この項終わり)

○『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』十一月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

話の旅
(四)

超常物語

①

まつ しょう しん
松浦行真

(浄土宗出版室長)

ほんほうはこのような話にはふれないで、そつと避けて通つたほうが賢明なのである。

たとえば、こういう挿話がある。
テレビ局がユリ・ゲラーを招いて、ス
ブーンまげの実験をやらせたのがきつ

けとなつて、そういう神秘的なことが、
一時、流行したことがある。

そうなると、その方面に詳しい先生を
お招きしてお話を伺うのが、ジャーナリ
ズムの常套的な編集法だから、この時
も、さる国立の研究所の理学博士が、あ

ちこちから引っぱりだことなった。

かりにこの先生を、Aとしておこう。

それを見すましてあるテレビ局が、さ
る高名な国立大学の教授と、そのA先生
の対談を企画した。

かりにこの先生をBとしておこう。

話がどう展開するか、楽しみにしながら
テレビを見ていたら、なんとなんと、
B先生が突如としてA先生にかみつきは
じめたのである。

もう古い話なので内容は忘れたが、例
えば、「そんなインチキなものを信じる
なんて、それでも君は科学者かッ」とい
った調子だったと記憶する。

理学界ではB先生のほうがずっと先輩
で、しかも有名人だ。それにひきかえ、

A先生はまだ若く、カンロクなどはクス
リにしたいとも見当らない。だからB先生
がカサにかかった言葉づかいをなさるの
も、やむを得ないと言えは言えるかもしれ
ないが、見ている者にとっては、あま
り気持のいいものではなかった。

その後、私はB先生と同じ大学の教授
をしておられた宮城音弥さんに会う機会
があったので、用件のすんだあと、くだ
んのテレビの一件を持ち出した。宮城さ
んは岩波新書に『超能力の世界』という
一冊をだしておられるほどで、ただの心
理学者ではない。幅の広い人だからであ
る。すると宮城さんは首をかしげて、
「B君がそんなこと、いうはずないんで
すがね」

「ほう、どうしてですか」

「だってB君はそのテの話が大好きでね。ずいぶんぼくところへ話にきたもの」

これには私もア然とした。

結局のところ、B先生は超常的神秘現象がお好きなのだが、世間が科学者として見る公式の場では、決してそれを表にださない方なんだなというのが私の到達した結論で、宮城さんもこの説に、相づちをうっておられた。

そんなわけで、超常的神秘現象はまだ市民権を得ていないのである。それだけに、扱いがむづかしい。私が冒頭において、「そつと避けて通ったほうが賢明」だといったのは、これがあるからであ

る。

しかし、筆者としては記録にのこしておきたい気持が、少なからずある。

いろいろ文献を調べてみると、法然さまも六十六歳ころを境に、しばしば「三昧発得」の境地に到られたことが、その伝記『法然上人行状絵図』（略称「勅修御伝」、以下この語を用いる）や、法然さま自身の著書『三昧発得記』にも、多数、記録されている。

難しいことをぬきにして、「三昧発得」とは何かというと、口称念仏を重ねることによって、アミダ仏や浄土のさまが「観られる」ことをいう。

こうした「三昧発得」は、同じ超常的神秘現象のなかでも、「聖」なる部にぞ

くするもので、いわゆる巷のそれとも一線を画するフシもあるにはある。これについてはまたのちに述べるとして、ともあれ法然さまも記録しておられるのだから、私もそのひそみにならわせていただく、筆をとることにした。

もう十年ちかく前になるが、一カ月ばかり、南太平洋の国々を、取材旅行でまわったことがある。昭和五十六年六月のことで、産経新聞夕刊の小説欄に、一年半にわたって連載した「遠すぎた島——ガダルカナル」（出版名「混迷の知恵——遠すぎた島ガダルカナル」）を書くためである。

もちろんその一つに、ガダルカナル島がはいっていた。この島は現在、ソロモン・アイランズ国という名の独立国となっているが、戦時中は英国領であった。首都をホニアラといい、いまから四十九年前に、日米の正規地上軍がはじめて激突し、死力をつくしたところである。

その激戦地の山野を、私はジープと足で、リュックをかついで廻ったのだが、この島では、ほとんど日本全国から集められた、主として若者たちの生命約二万一千余が失われている。

この二万一千余名のなかには、もちろん鉄砲の弾丸に当たって落命した人もいるが、それはごく少数である。アメリカ

軍は六万人が上陸したが、戦死者はわず
か千人、約一・七パーセントにすぎな
い。日本軍は作戦のまずさもあって（と
いうより、それ以外に方法がなかったのだ
が）、多少は多いとしても、その比率はあ
まり変わらないはずである。

では、二万一千余名のうちの九五パー
セント以上の人々が何で生命を落として
いったかというと、現代の若い人には信
じがたいことかもしれないが、すべてこ
れが飢えだったのである。だからこれら
の人々は、いずれも怨みを残し、万斛^{ばんこく}の
涙をのんでなくなっていた人たちばか
りとみていい。

私は出家だから、そのことを思って袈
裟と数珠と線香は携行した。「四誓偈^{しせいげ}」

一巻くらは誦経して、供養するのが当
然と思っていたからである。事実、回向
をしないで取材をしたことは、一度もな
い。これがよかったのだが、そのことは
またのちに述べる。

なにを目的に両軍がこの島で激突した
かという、要するにこれは「飛行場の
取り合い」である。

日本軍は当初、この島をオーストラリ
ア攻略の基地にしようとして、飛行場を
建設していた。もちろんアメリカ軍が反
撃にでてくるなどとは想像もしていなか
ったから、土木作業員を主とする陸戦隊
しかいなかった。いまだ米軍の準備成ら
ずと、計算していたのである。

ジャの道はヘビで、アメリカ軍は日本

軍が飛行場建設に着手したそのときから、脅威を感じた。そうなると準備不足などと言っておられない。拙速主義で上陸作戦を敢行してきたのである。日本軍の手薄に乗じて、これが成功した。

今度は逆に、日本軍が脅威をおぼえる番である。ここをとられると、前進基地のラバウルが直接おびやかされ、さらにはトラック島にある海軍の根拠地までも、危うくなってくる。

これが死闘のはじまりである。

しかしこの飛行場というのが、一筋縄ではゆかない。筆者はチャーターしたセスナ機から観察してすぐ思ったことだが、天然の要塞をなしているのである。

前は海。あとの三方はジャングルに囲

まれている。そして入り口の、飛行場にいたる街道筋は、距離にして二キロくらいだったと思うが、壁のように削ぎ立てた丘陵が海近くまで迫っているのだ。だからアメリカ軍が、街道沿いにくる日本軍を食い止めようとするなら、そこに狙いをつけた大砲を機械的にぶっ放しておれば、目的は達するのである。

シロウトの私にでも見当がつくくらいだから、クロウトの職業軍人はなおさらで、仕方なく彼らは、ジャングルのなかを迂回して、アメリカ軍を背後から攻めることにしたのである。

ところがこのジャングルというのが、これまた一筋縄のシロモノではない。

日本にも、一度入ったら二度と出てこ

られないという原生林が、甲府側の富士の裾野にある。青木ヶ原であるが、ここはふた抱えもみ抱えもある大木ばかりだが、ガ島のそれはまったく様相を異にする。

もちろん大木もあるが、その下生えに灌木が生えているところもあれば、トゲの生えた竹林もあった。かと思うと、ひよろひろ立ちの細い木が密生してしているところもあり、しかも木と木の間で結んで、蔦が縦横にからんでいるのだ。私はジャングル内の、日米両軍が夜襲で死闘を繰り広げた旧戦場に立ち、そこにアメリカ兵の飯盒はんごうのふたを見つけて見入っているとき、ふと傍らの空間を通る蔦にふれたとたん、アリの雨が降ってきた

のには魂たまげ消た。襟といわず袖口といわず、上にむけて開いているところには容赦なく降り込むのだから、たまったものではない。温度も高く湿度も高いジャングルのなかで、私はついに手拭いで襟巻きをしなければならなかった。救いといえば、毒ヘビはもちろん、ヘビと名のつくものが一切いないことくらいであつたろう。

しかも地形は峻険そのもので——山といつても丘陵にちかい小高さなのだが、どういうものか、どれもこれも屏風びんぷうのようにつつまれていて、頂上に登りつめたと思つたら、またどん底に降りて、一からつぎの山の胸突き八丁を登り直さなければならぬという、クソ意地のわるい

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

自然にはほとほと閉口した。

ルンガ合流点にむかう山中に、聯隊

砲、大隊砲、重機関銃と、重い順番に、

兵器が捨ててあったが、捨てた兵士たち

の気持がよく理解できた。率直に言っ

てわが身以外のものなら、爪楊枝すらも

捨てて行きたくなる峻険そのものの自然

であった。

そうした一つで、激戦地でもあったギ

フ高地で、はじめて人骨にであったこと

を、次回に記そう。

(つづく)

竹 中 信 常 著

佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁

イラスト入り

定価 五〇〇円

送料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)一―八二四七

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進に努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。）
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 十一月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年十月二十五日

印刷

平成二年十一月一日

発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒103 振替東京八一八二一八七番

◇◇ 平成三年用新版 ◇◇

浄 土 宝 暦

発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
年末年始の好便な檀信徒用施本として、広くおすすめいた
します。

B 6 判 総ページ数 40ページ

一部単価 65円 (200ブ以上 特価60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

====お申込み=====

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187